

Food Security Problems of the Inupiat in Northwest Alaska

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5792

アラスカ北西地域における イヌピアットの食料の安全保障問題*

岸 上 伸 啓

(要旨)

Inupiat hunters harvest seasonally migratory bowhead whales along the northwest coast of Alaska. The whaling and sharing of the resulting products are important in contemporary Inupiat society for the following reasons. First, the Inupiat can obtain culturally and nutritionally valued whale products only through whaling and sharing of the resulting products. Second, because whaling and sharing activities are organized and carried out on the basis of whaling boat crew, extended family, and other relationships in the village, those activities are closely related to the reproduction and maintenance of these relationships. Third, whaling as well as sharing and consumption of whale products form a basis for their ethnic and community identities. However, recently this whaling is being threatened by many factors such as climate change, oil and gas development, international anti-whaling movements, etc. In this paper, I will discuss Inupiat's whale hunts and sharing activities in Barrow in 2010 from the perspective of "food security". Based on this case, I argue that Inupiat's whaling and sharing of whaling products are a major "food security" means in the Inupiat society.

1 はじめに

気候変動による砂漠化や気温上昇など生態系の変化、紛争や自然災害の発生などが原因となり、世界各地、とくに南半球の第3世界において食料不足や水不足が頻発している。国連や開発支援 NGO など国際組織、欧米や日本の各国政府は食料提供や医療提供の支援活動を展開している。

1974年の世界食料会議や1983年の食料農業機構 (FAO) において食料の安全保障(food security)は

問題となった。数々の議論を経て、1996年にローマで開催された世界食料サミットにおいて、食料の安全保障とは「すべての人びとが、つねに、元気で健康な生活を営むために、食事の必要性と食の好みを満たし、満足な量があり、安全で、栄養のある食料に対して物理的かつ経済的なアクセスを持つこと」(World Food Summit 1996)と定義され、喫緊の国際的政治経済問題の一つとして認識されるようになった。

しかし、この食料の安全保障は、発展途上国だけの問題ではなかった。日本のように食料自給率が低い国々も食料供給の不安定性の問題に関心を持っている。また、穀物自給率が130%を誇る米国でさえ低所得者層は恒常的な飢えに悩んでいる。日本や欧米諸国も食料の安全保障は国内問題のひとつであると認識し、独自の農業政策を模索し、展開している。

このような事情から食料の安全保障の問題は、第3世界の食料問題として研究されるか、欧米諸国の食料自給のための農業政策の問題として研究される傾向がある(たとえば、ポワチエ 2003; 本間 2012)。しかし、これらの研究の中でほとんど取り扱われていない領域が存在する。それは、第1世界に住む先住民の食料の安全保障問題である。たとえば、カナダのイヌイットはカナダ国民であるが、食生活を含む独自の先住民文化を保持しているため、主流国家の枠組みとは別に、彼らにとっての食料の安全保障を検討すべきであると考えられる(ex. Duhaime and Bernard eds. 2002)。

ここで「安全保障」概念についてひとこと触れておきたい。安全保障は、かつては国家と国家の対立を焦点とし、国家の安全保障のことを指すことが多かった。しかしソ連の崩壊後、国家間の戦争よりも気候変動問題や飢餓問題、難民問題な

ど全人類に係わる問題が重要視されるようになり、1994年の国連開発計画（UNDP）の人間開発報告書において「人間の安全保障」が提起され、個々人の生命と尊厳の重要性が強調されるようになった。そして2000年に開催されたミレニアム総会でアナン国連事務総長は、人類が直面する諸問題に対処するために、「人間の安全保障」に関連して恐怖からの自由と欠乏からの自由を強調した。

食料の地域的な不足や偏在は、今や全人類や国際機関、国家、さまざまな団体が取り組まなければならない大問題である²。「食料の安全保障」を開発の中心にすえる立場からすれば、「食料の安全保障」は「人間の安全保障」の一部であると考えられる。しかし、食料の安全保障は、単なる食料の欠乏からの自由ではなく、人びとが好む食料の欠乏からの自由である(World Food Summit 1996)。従って、食料の安全保障とは、「食料確保は量の確保だけでなく、質とサービス、文化や環境にも配慮した食料の提供」(本間 2012:54)である。

筆者は、別稿(岸上 2010)においてカナダの先住民イヌイト (Inuit) の食料の安全保障について論じたことがあるが、本稿では米国アラスカ州バロー村の先住民イヌピアット (Inupiat) の事例を用いて、現代のイヌピアット社会における捕鯨とそれに関連する分配を、食料の安全保障の観点から検討するとともに、文化の安全保障においても

重要であることを例証したい。なお、ここで言う「文化の安全保障」とは、人びとが望ましいと考える生活様式を享受し、その継承を保障することである。

2 現代イヌピアット社会における食料事情

イヌピアットとは、アラスカ北西地域の沿岸部に居住する先住民である。彼らは、現在、バローやポント・ホープなどの村に住み、賃金労働に従事しながら狩猟や漁労を行っている。春と秋にホッキョククジラの捕獲を行うが、捕鯨とそれに関連する祭りなどの諸活動は彼らの生活様式の重要な一部分を構成している。

現在の村落では、賃金労働という市場経済と伝統的な狩猟・漁労という生業経済が混交して独自の経済システムを形成している。狩猟や漁労を行うには、船外機付きボートやスノーモービル、ライフル、銃弾、漁網、ガソリン、オイルなどを利用しなければならないため、現金の投入なしに狩猟や漁労を実施することはできない。イヌピアットが狩猟や漁労を継続できるのは、賃金労働からの現金収入やアラスカ州政府からの石油開発の配当金、地域と村落の先住民会社からの配当金、年金、その他の補助金を利用しているからである。

その一方で、アラスカ北西地域の村々では食料品の大半を飛行機や大型船舶で搬入しなければな

品目	量	アンカレッジの価格	バローの価格
冷凍牛乳	3.78リットル	3ドル39セント	11ドル79セント
牛ステーキ	454グラム	3ドル99セント	7ドル79セント
豚肉 (Pork chops)	454グラム	2ドル99セント	6ドル99セント
卵	12個	2ドル59セント	5ドル19セント
バター	454グラム	5ドル19セント	6ドル25セント
砂糖	2.27キログラム	4ドル39セント	8ドル99セント
コーラ・ペプシ	6缶	4ドル39セント	6ドル50セント
ガソリン	3.78リットル	3ドル83セント	5ドル75セント
バナナ	454グラム	89セント	2ドル99セント
小麦粉	2.27キログラム	3ドル45セント	12ドル75セント
食パン	680グラム	3ドル49セント	5ドル75セント

図表1 2010年のアンカレッジとバローにおける食料品の価格比較リスト

出典：(North Slope Borough 2012: 33-34)

らないため、同州の主要都市アンカレッジやフェアバンクスにおける同一の食料品の価格と比べて相対的に高い。たとえば、バローにおける食料品価格はアンカレッジの約2倍である(図表1)。このため地元で獲れる動物や魚類、鳥類は村の人びとにとって重要な食料品もしくは補足的な食料品となる。すなわち、現在では彼らの生業経済は市場経済の上に成り立っているが、人びとの食料調達に貢献している。

バロー村のイヌピアットは、地元で獲れる海獣や陸獣、鳥類の肉や魚類とともに店舗で購入した食料を食べている。統計的な詳細は不明であるが、カロリー摂取の点では店舗で購入した食料が食事の大半を占めている一方、タンパク質の摂取という点では地元産の肉や魚類がかなりの割合を占めていると考える。現時点では彼らは店舗から購入する食料品だけでも生活できるが、多くの中高年の人びとは地元で獲れる海獣や陸獣、鳥類の肉や魚類を好んでいる点を指摘しておきたい。

2010年の時点で、イヌピアット全体の98.7%が狩猟や漁労から得た肉や魚を食料として利用していた(North Slope Borough 2012: Table 50)。そして自己申告であるが、狩猟や漁労で得た食料が世帯の食事の中で占める割合は、まったくない世帯が0.7%、非常に少ない世帯が12.0%、半分より少ない世帯が27.6%、半分の世帯が25.8%、半分より多い世帯が18.0%、ほぼすべての世帯が13.2%、すべての世帯が2.7%であった。すなわち、約60パーセントのイヌピアット世帯が食事の半分以上は狩猟や漁労から得た肉や魚に由来すると回答している(North Slope Borough 2012: Table 51)。

バロー村在住のイヌピアット世帯のうち3世帯に1つ(約33%)が十分な食料を得るのに困難を感じると回答している(North Slope Borough 2012: Figure 17)。そして2009年には22%のイヌピアット世帯が十分な食料を入手することができないことがあったと報告している(North Slope Borough 2012: Figure 18)。このようにバロー村においては食料の入手に不安定性が認められる³。

3 ホッキョククジラの捕獲と分配の仕組み

カナダのイヌイット社会やアラスカの先住民社

会では、食料分配の制度が行き渡っており、食料の扶助制度が確立している。この分配は、食料がない場合には食料を持っている人からもらい、食料を持っている人は食料がない人にあげるという慣習的な実践である。家族親族や同じキャンプ地、同じコミュニティに住んでいる人びとの間での実践であり、一種のセイフティ・ネットワークの機能を有している(たとえば、岸上 2003; Kishigami 2000, 2004; Bodenhorn 2000; Wenzel 2000)。

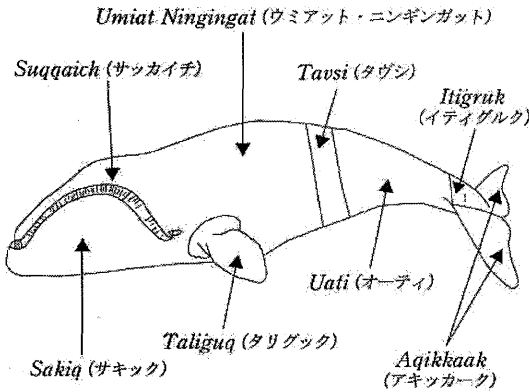
2010年の統計調査によると、バロー村のイヌピアット世帯の94%が、狩猟や漁労で得た食料を分配しているという(North Slope Borough 2012: Table 68)。他の世帯からもらった狩猟や漁労で得た肉や魚の量の食事全体で占める割合は、まったくなしの世帯が13%、非常に少ない世帯が22%、半分未満の世帯が14%、半分の世帯が11%、半分より多い世帯が5%、ほぼすべての世帯が8%、すべての世帯が28%であった。約50%の世帯が食べる地元産の肉や魚は他の世帯からもらったものである(North Slope Borough 2012: Table 54)。一方、狩猟や漁労で得た肉や魚のうち他の世帯にあげた量の割合は、まったくなしの世帯が27%、非常に少ない世帯が16%、半分未満の世帯が20%、半分の世帯が23%、半分以上の世帯が10%、ほぼすべての世帯が4%、すべての世帯が1%であった。約38%のイヌピアット世帯が半分以上の獲物を他の世帯にあげていると申告している(North Slope Borough 2012: Table 55)。このようにバロー村では地元産の肉や魚などの分配がかなりの頻度と割合で行われている。

この分配は、規則に基づく分配と自主的な分配の2種類に大別することができる(岸上 2012)。クジラの規則に基づく分配は、大量の肉や脂皮などを村人全員にもたらずことになるので、特に重要である。

アラスカ州バロー村では、春季と秋季にホッキョククジラ(以下、クジラと略称)を捕獲するが、1年あたりの捕獲頭数の上限枠は22頭である。2008年から2012年までの期間にバロー村で水揚げされたクジラの頭数は図表2の通りである⁴。

年	2008	2009	2010	2011	2012
春季	9	4	14	7	14
秋季	12	15	8	11	10
合計	21	19	22	18	24

図表2 バロー村におけるクジラの水揚げ頭数
出典: (岸上 2012: 151)



図表3 部位名

捕獲されたクジラは、特定の規則に沿って解体され、分配される。この解体とそれに伴う分配は、村によってやり方が異なるが、同じ村の中でもキャプテンによって多少の差異が認められる。村落間での差異の報告と分析については、別稿(岸上 2012)に譲るとして、ここではバロー村において現在、もっとも一般的だと考えられる規則を紹介する(図表3を参照)。

(1)Tavsi (タヴシ) : 性器の部分から後方に幅約30センチの部分の肉と脂皮(脂肪付き皮部)は、半分が捕獲に成功した捕鯨グループに、残りの半分はキャプテン宅での祝宴で料理され、村人に振舞われる。

(2)Uati (オーティ) : Tavsiの部分から尾びれまでの間の部分は、キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭や感謝祭、クリスマスの時の祝宴に提供される。

(3)Itigruk (イティグルク) : Uatiと2枚の尾ひれとの間の部分は、キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭の祝宴に供される。

(4)Aqikkaak (アキッカーク): 2枚の尾びれは、キ

ャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭や感謝祭、クリスマスの時の祝宴に提供される。

(5)Umiat Ningingat (ウミアット・ニンギンガット) : Tavsiから口先にかけての髭とあご、2枚の胸びれの部分を除いた部位は、クジラの解体を手伝ったほかの捕鯨グループに提供される。ただし、各季節の最初に捕獲されたクジラのこの部位は、バロー村で登録しているすべての捕鯨グループに平等に分配される。また、秋季捕鯨の場合には、海岸から解体場までクジラを運搬するブルドーザーの操縦士にも1シェア (share) が与えられる。

(6)Suqqaich (サッカイチ) : 髭の半分は捕獲した捕鯨グループに、残りの半分はクジラを曳航するのを助けた捕鯨グループに提供される。

(7)Sakiq (サキク) : 口から顎にかけての部位の半分は、捕鯨に成功した捕鯨グループのキャプテンに、残りの半分はクジラを曳航するのを助けた捕鯨グループの間で平等に分配される。

(8)Taliguq (タリグク) : 一方の胸びれは鉾の打ち手 (ハーブナー) に、もう一方の胸びれは解体場所にいるすべての捕鯨グループに与えられる。

(9)Utchik (ウチク) : 舌の半分は解体に従事しているすべての捕鯨グループに与えられ、舌の4分の1はキャプテン宅での祝宴で、そして残りの4分の1はナルカタック祭の祝宴で村人に振舞われる。

(10)Uumman (ウーマン、心臓) や Ingaluaq (インガルアック、小腸)、Taqtu (タクトウ、腎臓) の半分はキャプテン宅での祝宴で、残りの半分は、キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭で振舞われる。

解体と上記の分配が終了すると、キャプテンが号令を出す。この号令後は、だれでも残った肉や脂肪を自由に取っていくことが許される。この分配は、「ピラニアック」(pilaniaq) と呼ばれる。

このように捕獲されたクジラの肉や脂皮を、捕獲に成功した捕鯨グループが独占的に所有するのではなく、クジラの解体や曳航を助けた捕鯨グループや他の人々に規則に従って分配される仕組みになっている。

捕獲されたクジラの肉や脂皮は、最初に捕鯨やクジラの解体場所への曳航、解体を手助けした他

の捕鯨グループに分配された後、キャプテン宅での祝宴やアプガウティの祝宴(岸上 2011)、ナルカタックの祝宴(岸上 2013)、感謝祭の祝宴、クリスマスの祝宴などの一連の祝宴において村人と共食されるとともに、大量の肉が分配される(岸上 2012)。この結果、クジラの産物は村のイヌピアットや村外に住む彼らの家族や親族、友人の手元に届くことになる。

4 2012年のパロー村におけるクジラの分配事例

ここでは、2010年のホッキョククジラの水揚げを事例として、村全体にもたらされた鯨肉や脂皮の総量を推計した後、その重要性を検討してみたい。パロー村のハンターは、全長が10メートル前後のクジラを好んで捕獲するが、既存のデータを利用して、1頭のクジラの各部位の分配を重量の観点から見てみる。

ジョージらは全長11メートル、総重量14,797キログラムのオスクジラの各部位の重量について、図表4のように報告している(George, Philo, Carroll and Albert 1988)。なお、この全長11メートルのホッキョククジラは、イヌピアットが捕獲している平均的な大きさのクジラである。

部位名称	重量	重量の割合
舌	893キログラム	(6%)
脂皮	6,601キログラム	(44%)
	* 可食部分は4分の1か5分の1程度	
肉	2,428キログラム	(16%)
髭	595.5キログラム	(4%)
尾びれ	217.7キログラム	(1.5%)
胸びれ	349.2キログラム	(2.4%)
腎臓 (両方)	97.9キログラム	(0.7%)
心臓	95.2キログラム	(0.6%)
小腸	223.8キログラム	(1.5%)

図表4 体長11メートルのホッキョククジラの各部位の重量と割合

出典：George, et. al (1988)より作成

この各部位の重量の割合は、ほかの大きさのホッキョククジラにもほぼ比例すると考えられている(George, Philo, Carroll and Albert 1988)。また、解体・分配の時の*Umiat Ningingat, Tavsi, Uati*の部位の比率は、大雑把に分けるとそれぞれ60パーセント、10パーセント、30パーセントである(Hepa and Brower, Jr. 1998)。この比率に従い、肉と脂皮の重量を推定してみたい。なお、可食の脂皮部は20%と仮定する。

2010年にパロー村で水揚げされたクジラは22頭で、平均体長は9.3メートルであった⁵(岸上 2012: 166)。体長をもとに水揚げ総量を計算すると275.2トンとなる⁶。これをもとに計算すれば、可食部分は肉が約44トンで、脂皮が約24.2トンである。これ以外に、舌が約16.5トン、髭が約11トン、尾びれが約4.1トン(可食部位は約0.82トン)、胸びれが約6.6トン(可食部位は約1.3トン)、腎臓(2つ)が約1.9トン、心臓が1.7トン、小腸が約4.1トンとなる。髭以外の部位は、食べることができる。

通常、舌と腎臓、心臓、小腸の半分は捕獲直後のキャプテン宅の祝宴で消費され、*Umiat Ningingat, Tavsi, Uati*の部位の比率を、大まかに分ければそれぞれ60パーセント、10パーセント、30パーセントであるとすれば、次のように推定できる。

約2.2トンの肉、約1.2トンの脂皮、約8.3トンの舌、約0.95トンの腎臓、約0.85トンの心臓、約2.1トンの小腸が捕獲直後のキャプテン宅の祝宴によって村人に提供されることになる。また、アプガウティ、ナルカタック祭、感謝祭、クリスマスなどの祝宴に提供される肉は約13.2トン、脂皮は約7.3トン、尾びれの脂皮は約0.82トンである。一方、村の捕鯨者たち(約45集団)は、約26トンの肉、約14.5トンの脂皮、約1.3トンの胸びれの脂皮、約8.3トンの舌、約0.95トンの腎臓、約0.85トンの心臓、約2.1トンの小腸を入手できる。ただしこれらの部位は、45人の捕鯨キャプテンの差配によって、約270世帯以上(推定)の捕鯨者世帯に再配分される⁷。これらを捕鯨者世帯と村人世帯に分けて、表にしたのが、次の図表5である。

村人に分配される各部位の総量		捕鯨者に分配される各部位の総量	
肉	約15.4トン	肉	約28.5トン
脂皮	約8.5トン	脂皮	約15.7トン
尾びれの脂皮	約0.82トン	胸びれの脂皮	約1.3トン
舌	約8.3トン	舌	約8.3トン
腎臓	約0.95トン	腎臓	約0.95トン
心臓	約0.85トン	心臓	約0.85トン
小腸	約2.1トン	小腸	約2.1トン
(単純総量) 36.92トン (39%)		(単純総量) 57.7トン (61%)	

図表5 2010年の可食部位の村人世帯と捕鯨者世帯に分配された重量(推定)

図表5から分かるように捕鯨によってもたらされた可食部位の約40パーセントは、祭りの祝宴時の共食や分配を通して全世帯へと提供され、残りの60パーセントは約45の捕鯨集団(約270世帯以上と推定)の間で分配される。後者はさらに捕鯨者世帯から個人的な分配を通して他の世帯へと分配されていく(Bodenhorn 2000)。

2010年の統計によると、バロー村のイヌピアット人口は約3230人、イヌピアット世帯の数は約555であった(North Slope Borough 2012)。2010年には約94.6トンの鯨肉などの可食部位が村にもたらされたことになる。少なくともそのうちの約40パーセントは共食や分配によって村全体に提供されるので、1年あたり赤ん坊も含めた村人1人あたりが入手した可食部位の重量は、約14キログラムである。このほか捕鯨者世帯からの鯨肉などの分配を考慮すると、捕鯨に携わらない村人1人あたりが入手する鯨肉などは年間15キロを超えると考えられる。

5 イヌピアット社会における食料の安全保障としての鯨肉の共食と分配

捕鯨とその後の祝宴での共食や分配は、イヌピアット世帯に鯨肉などをもたらす手段となっている。ここでイヌピアットにとっての鯨肉や脂皮の共食や分配、消費の意義を検討しておきたい。

第1は、鯨肉や脂皮の文化的重要性である。イヌピアットは鯨肉や脂皮など鯨産物を食べることを大変に好んでいる。それらはイヌピアットにとっては特別な食料であり、それらを食べること

によってイヌピアットであることを実感することができる。また、捕鯨祭やクリスマスなどの祝宴において村人が集まって共食をすることは、我々意識や村人意識を醸成する。このように鯨肉などを食べることは、彼らのアイデンティティの基盤のひとつである。

第2は、栄養学的重要性である。近年、極北地域では残留性有機汚染物質や重金属類による環境汚染、その結果として海獣の脂肪部にそれらの有害物質が高濃度で蓄積されていることが指摘されており、それらを食料とする極北先住民の健康被害が懸念されている。しかし、健康被害の懸念はあるものの、適度に摂取すれば、特に問題がないことが指摘されている。むしろ米国本土で製造された加工食品を食べるよりは、地元で捕獲される海獣の肉や脂肪を適度に食べる方が健康にはよいと考えられている(岸上 2002)。ホッキョククジラの肉は良質な蛋白源であり、その脂身は良質な脂肪源である。また、クジラの脂肪には、高血圧、コレステロール、心臓発作、脳卒中、糖尿病などを予防する物質(オメガ3脂肪酸)が含まれており、健康維持に効果のある食料である(Reynolds et. al 2006)。

第3は、経済的な重要性である。先住民生存捕鯨に由来する鯨産物は原則として金銭による売買が認められておらず、イヌピアットの人々は慣習に従って共食したり、分配したりしている。物価が高い極北地域において、ホッキョククジラをはじめとする海獣の肉や脂肪は多くの村人にとって無料で手に入る重要な食料である。各捕鯨集団の

春季捕鯨は約2万5千ドルから3万ドルの経費を必要とし、秋季捕鯨には約1万ドルから1万5千ドルの経費を必要とする（岸上 2012）。このため各捕鯨集団のキャプテン夫妻らは毎年3万ドル以上の現金を必要とする。しかし、捕獲されたクジラの肉などの約40パーセントは村人に無料で提供される。このため多くの村人にとって鯨肉や脂皮は、牛肉や豚肉、鶏肉のように現金を支払って購入しなければならない食料ではない。従って、鯨肉などの共食や分配は老人や寡婦、失業者ら社会的弱者には特に恩恵をもたらすと考えられる。

このように鯨肉自体、そしてそれを消費することはイヌピアットにおいて文化的にも、栄養学的にも、経済的にも重要である。また、鯨肉などを入手するための捕鯨活動やその成果物の分配は、捕鯨集団内の社会関係や捕鯨集団間の社会関係、家族・親族関係、友人関係、近隣関係など特定の社会関係によって組織され、実践される社会的活動である。これらの活動を通して既存の社会関係が確認され、維持されたり、新たな社会関係が創り出されたりする。従って、捕鯨活動や分配は社会的に重要であるといえる。さらに、鯨肉などを食べるのみならず、捕鯨を行うこと自体、その成果を分配すること自体が、捕鯨者や村人のアイデンティティの基盤となっている。

このように考えると、鯨肉を確保し、慣習的なやり方で消費することは、イヌピアットのアイデンティティの維持の基盤となる。このため、筆者は、同社会においては鯨肉の確保は、文化(生き方)の安全保障につながると主張したい。

6 結語

本稿ではアラスカ先住民イヌピアットを事例として、彼らの捕鯨活動およびその後の鯨産物の分配を食の安全保障の観点から検討した。その結果、いくつかの点が明らかになった。

捕鯨とその後の分配は、現在のイヌピアットにとって以下の点で重要である。(1)捕鯨と分配を通してのみすべての村人は、文化的かつ栄養学的に重要な鯨肉などを入手できる。(2)捕鯨と分配は、村内の特定の社会関係に沿って組織され、行われるため、社会関係の再生産と深く関わってい

る。(3)捕鯨や分配、そして鯨肉を食べることはイヌピアットとしてのアイデンティティの基盤である。

筆者は現代のイヌピアット社会において捕鯨とその後の鯨肉の分配は、食の安全保障の重要な手段であると主張する。しかし、近年、地球温暖化による風向きや海氷の不安定化や動物愛護団体・環境保護団体による反捕鯨活動の影響によってイヌピアットの捕鯨活動の実施は難しくなりつつある(岸上 2009; Kishigami 2010)。

すでに1996年のローマ宣言の中で食の好みを満たすことが言及されているように、単に飢えや食料自給率からのみで、食料の安全保障を考えることはすべきではない。食事の作法や食の好みは歴史的に形成された個別文化の一部であるため、食の安全保障とは文化と深く関わっている。イヌピアット社会の場合は、クジラの獲得や鯨産物の分配と消費は彼らの社会の生活の核となっており、人びとが好む食料の確保と利用は、彼らの生活様式の維持や継承につながる。筆者は捕鯨が衰退すると、食料供給の不足のみならず、社会的かつ文化的な問題を引き起こす可能性が高いと考える。このため、イヌピアット社会では捕鯨やその産物の分配が多面的な重要性を持つ。従って、アラスカのイヌピアット社会では伝統的な食料の安全保障は、文化の安全保障の基盤であると主張したい。

* (謝辞) 本研究は、2009年度～2013年度科学研究費補助金・基盤研究 (B) 「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」(課題番号: 21401045、代表者: 岸上伸啓) の研究成果の一部である。アラスカ州バロー村のHerman Ahsoakさん、Johnny Leavittさん、Eugene Browerさんをはじめとする村人の方々から、現地調査に対してご協力とご援助を頂戴した。また、国立民族学博物館外来研究員の中村真里絵さんには草稿に対しコメントを頂戴した。これらの方々への感謝の微意を表したい。

注

- 1 「安全保障」論と「食料の安全保障」論の関係やそれらの保障論の歴史的な展開については、本間(2012)を読まれない。
- 2 近年は、気候変動のもとで世界における食料の安全保障をいかにすれば実現できるかが大きな課題としてあげられている(小泉・金丸 2012)。
- 3 ノーススロープ郡の中では、バロー村は仕事の数も多く、他の村よりも経済的な条件は恵まれている。他の村の食料事情はバロー村よりも悪いと考えられる。
- 4 2008年から2012年までの期間のバロー村では、国際捕鯨委員会が承認した捕獲枠の分配に基づき、一年平均22頭、5年間で110頭まで捕獲してよいことになっていた
- 5 バロー村の捕鯨者は、捕獲が容易で味のよい若い小型のクジラを捕獲する傾向がある。
- 6 ホッキョククジラがイヌピアットの食事全体の中で占める割合は、1977年の時点で約19パーセントであった(Donovan 1982: 81)。詳細は不明だが、当時と比べイヌピアット人口が2倍近くになった2000年代にはその割合がさらに低下していると推定される。すなわち、筆者は、鯨肉や脂皮はイヌピアットの日常食というよりも象徴的な食べ物になりつつあると考える。ただし、クジラの肉や脂皮は少量であっても日常的に食されている。
- 7 2010年の春季捕鯨や解体、祝宴の準備などになんらかの形で参加した男性は438名(男性の42.3%)、女性は240名(女性の24.6%)と報告されている(North Slope Borough 2012: Table 56)。一方、秋季捕鯨に参加した男性は394名(38.1%)、女性は223名(22.8%)と報告されている(North Slope Borough 2012: Table 57)。

参考文献

(和文)

岸上伸啓

- 2002 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題—その現状と文化人類学者の役割—」『国立民族学博物館研究報告』27(2): 237-281。
- 2003 「狩猟採集民社会における食物分配の類型について—「移譲」、「交換」、「再・分配」」『民族学研究』68(2): 145-164。

- 2009 「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察—アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から—」『国立民族学博物館研究報告』33(4): 493-550。
- 2010 「カナダ極北地域における食糧の安全保障について—ヌナヴィク・イヌイト社会を事例として」上田晶子編『食料と人間の安全保障』pp.43-59. 大阪：大阪大学グローバルコラボレーションセンター。
- 2011 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの祝宴アプガウティについて」『人文論究』80: 97-110。
- 2012 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』36(2): 147-179。
- 2013 「(研究ノート) 米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて—祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に—」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 393-419。

小泉達治、金丸秀樹

- 2012 「気候変動と世界の食料安全保障」『環境科学会誌』25(6): 487-492。

ポワチエ、ヨハン (山内彰・西川隆訳)

- 2003 『食糧確保の人類学：フード・セキュリティ』東京：法政大学出版局。

本間正義

- 2012 「安全保障論の系譜と食料安全保障」『農業経済研究』84(2): 51-56。

(英文)

Bodenhorn, Barbara

- 2000 It's Good to Know Who Your Relatives Are but We were Taught to Share with Everybody: Share and Sharing among Inupiaq Households. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishgami (eds.) *The Social Economy of Sharing : Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp. 27-

60. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2005 Sharing Costs: An Exploration of Personal and Individual Property, Equalities and Differentiation. In Thomas Widlok and Wolde Gossa Tadesse (eds.) *Property and Equality* Vol.1 (Ritualisation, Sharing, Egalitarianism), pp. 77-104. New York and Oxford: Berghahn Books.
- Donovan, G. P.
- 1982 The National Whaling Commission and Aboriginal/Subsistence Whaling: April 1979 to July 1981. *Report of the International Whaling Commission* (Special Issue 4), pp. 79-86. Cambridge: International Whaling Commission.
- Duhaime, G, and N. Bernard (eds.)
- 2002 *Arctic Food Security*. Edmonton: CCI Press, University of Alberta and Quebec City: CIÉRa, Université Laval.
- George, J. C. et al.
- 1988 1987 Subsistence Harvest of Bowhead Whales, *Balaena mysticetus*, by Alaskan Eskimo (SC/39/PS12), *Report of the International Whaling Commission* 38:389-392.
- Kishigami, Nobuhiro
- 2000 Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing : Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp. 171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004 A New Typology of Food-sharing Practices among Hunter-gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.
- 2010 Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska. *Études/Inuit/Studies* 34(1): 91-107.
- North Slope Borough
- 2012 North Slope Borough 2010 Economic Profile and Census Report. Barrow, Alaska: Department of Administration and Finance, North Slope Borough.
- Reynolds III, J. E. et al.
- 2006 Human Health Implications of Omega-3 Fatty Acids in Blubber of the Bowhead Whale (*balaena mysticetus*). *Arctic* 59(2): 155-164.
- Wenzel, George
- 2000 Sharing, Money, and Modern Inuit Subsistence: Obligation and Reciprocity at Clyde River, Nunavut. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing :Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp. 61-85. Osaka: National Museum of Ethnology.
- World Food Summit
- 1996 "Rome declaration on World Food Security" (<http://www.fao.org/docrep/003/w3613e/w3613e00.H-TM>) (2013年11月1日閲覧)
- (国立民族学博物館・総合研究大学院大学)